

## (44)

氏名(生年月日)	イ 飯	グ 田	トミ 富	オ 雄
本 籍				
学位の種類	医学博士			
学位授与の番号	乙第1043号			
学位授与の日付	平成元年10月20日			
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当(博士の学位論文提出者)			
学位論文題目	乳癌組織におけるヒドロキシプロリン量の検討			
論文審査委員	(主査) 教授 羽生富士夫			
	(副査) 教授 浜野 恭一, 太田 和夫			

## 論文内容の要旨

## 目的

癌の進展に深い関連があるといわれる間質組織の主たる構成成分であるコラーゲンについて、コラーゲン蛋白の指標とされるヒドロキシプロリン量を測定し、乳癌の臨床病理学的因子との関係についてみた。

## 対象および方法

対象：当科で乳房切断術を行った乳癌40例である。ヒドロキシプロリン量の測定には、摘出乳腺の癌組織および非癌組織を供した。

測定方法：検体を100℃で16時間乾燥後、6N塩酸1.5mlを加え封管して105℃24時間加水分解。次に水を加えて再度乾燥させた後、乾燥重量10mgにつき0.02N塩酸を1ml加え濾過し、濾液をさらに0.02N塩酸で10倍に希釈してアミノ酸分析計で分析し、乾燥重量1mgあたりのヒドロキシプロリン量を測定した。

測定結果を臨床病理学的因子、年齢、レセプター、組織CEAとの関係から検討した。

## 結果および考察

1. 癌組織のヒドロキシプロリン量は、正常乳腺よりは多く、乳腺症よりは少なかった。

2. 組織型別のヒドロキシプロリン量は、硬癌、乳頭腺管癌、充実腺管癌の順に多かった。硬癌と充実腺

管癌の間に有意な差を認めた ( $p < 0.01$ )。

3. 腫瘍径とヒドロキシプロリン量の間には、差を認めなかった。

4. リンパ節転移との関係では、転移陽性例が有意にヒドロキシプロリン量が多かった ( $p < 0.05$ )。

5. 病期別では、stage II~IVはstage Iに比し、ヒドロキシプロリン量が多い傾向がみられた ( $p < 0.10$ )。

6. 脈管侵襲の有無とヒドロキシプロリン量には、相関がみられなかった。

7. 年齢とヒドロキシプロリン量の間をみると、相関係数-0.36をもって負の相関がみられた ( $p < 0.05$ )。

8. ホルモン・レセプター、組織CEA量とヒドロキシプロリン量の間には相関はみられなかった。

癌組織におけるヒドロキシプロリン量が正常組織より多かったことより、乳癌組織では正常組織よりもコラーゲンの生成が活発であることが示唆された。ヒドロキシプロリン量が多かったのは、浸潤型の発育形式を示す硬癌、リンパ節転移陽性例や癌の進行が早いといわれる若年者であり、コラーゲンは癌の進展に深い関連があることが示唆された。

## 論文審査の要旨

ハイドロキシプロリンは癌の進展に深い関係があるといわれているコラーゲン蛋白の指標である。

本研究は、乳癌組織におけるハイドロキシプロリン量を測定し、臨床病理学的諸因子との関係について検討した結果、浸潤型の発育形式を示す硬癌、リンパ節転移陽性例、癌の進行が早いといわれる若年者でハイドロキシプロリンが多いことを明らかにしたもので、临床上、学術上価値あるものと認める。

### 主論文公表誌

乳癌組織におけるハイドロキシプロリン量の検討

日本外科学会雑誌 第90巻 第6号  
914-919頁 (1989年6月1日発行)

### 副論文公表誌

- 1) 乳腺外来生検症例の検討  
日臨外会誌 44 (1) : 122-126, 1983
- 2) 組織型別にみた浸潤癌通常型乳癌の検討  
日臨外会誌 45 (6) : 706-710, 1984
- 3) 胆嚢腺扁平上皮癌の1例  
東京女医大誌 55 (6) : 518-521, 1985
- 4) 75歳以上高齢者乳癌の検討  
外科 48 (5) : 494-496, 1986

- 5) 乳癌における血清および組織 CEA の意義  
—とくに再発予知について—  
日臨外会誌 48 (8) : 1029-1034, 1987
- 6) 乳癌における Androgen Receptor の検討  
乳癌の臨床 2 (3) : 431-434, 1987
- 7) 乳癌における digital subtraction angiography の有用性についての検討  
外科 50 (5) : 493-497, 1988
- 8) 乳頭部表皮内進展のみられた乳癌の臨床病理学的検討  
乳癌の臨床 3 (4) : 579-583, 1988